

中国「華僑大学」が有するアイデンティティ形成の学校文化

～広州・暨南大学でのフィールド調査から～

石川 朝子（大阪大学大学院）

はじめに

これまでの華僑教育研究には、共通した傾向が見られる。それは「研究の視点は終始、海外の華僑社会にあるということである」(廖ら 1988)。換言すると、中華学校・華僑学校など居住国における教育についての研究が中心であるということである。しかし廖(1988)は、このことを次の理由から批判している。

『華僑教育』は、三つの部分を含んでいる、即ち、海外の華僑教育、華僑の取扱う教育と国家の取扱う教育である。しかも、あとの二者は海外華僑の居住地ではなくて、中国国内で行っているのである。今回の発表では、華僑の居住地で行われている教育ではなく、いままで研究されることの少なかった中国国内の教育活動に焦点を当てる。

中国には、華僑のための大学（以下、「華僑大学」）が存在している。これは、中国政府が海外華僑・華人子弟への教育を目的として設立した大学である。今回の研究発表では、中国・広州にある「華僑大学」のひとつ、暨南大学での現地調査で得られたデータを通して、「華僑大学」でどのような教育活動が行われているのかに着目する。

1. 問題意識と視点

華僑教育とは、「広義でいえば、華僑の民衆教育もしくは一般教育のことである。また華僑自身が推し進める教育、中国政府が華僑に対して行う教育…。狭義でいえば、華僑教育とは政府が華僑の為に行う教育である」(李 1997)。その華僑教育の目的や主旨は「華僑居住地の華僑社会に影響を与える中国の伝統文化を伝えること」(廖 1988)であった。華僑のための教育機関の一つとして挙げられて

いるのが、「華僑子弟が一時帰国し国内で一定期間教育をうけるための機関として政府が設けたもの（広州の暨南大学、泉州の華僑大学など）」である。このように「華僑大学」は本来、「中国の伝統文化を伝えること」、即ち中国人アイデンティティを形成する目的をもった教育機関であるといえる。では「華僑大学」はどのような学校文化を通じてこの目的を達成しようとしているのだろうか。

先行研究では、学校文化は4つの構成要素で説明されている(久富 1996)。それは、①制度文化、②教員文化、③生徒文化、④「校風」文化であり、学校文化を構成するこれら4つの要素を「顕在」的側面と「潜在」的側面に二分して説明している。またイギリスと日本におけるマイノリティと学校文化について研究した志水(2002)は、「教員文化」をその主要な構成要素とみなしている。本発表においても、カリキュラム・制度という顕在的な制度文化を明らかにするとともに、教室内における教員との相互作用を描き、教員間で共有されている華僑学生へのまなざしを分析していく。

2. 調査の概要と調査対象

以上のような問題意識から、中国・広州にある暨南大学で調査を行った。2007年3月から5月の3ヶ月間、大学での資料収集や、華僑大学生への聴き取り調査を行った。インタビューは、日本華僑の青年3名に対して行った。インタビューでは、留学の目的や大学生活などの質問を中心に、かれらのライフストーリーを聞き取った。今回の発表では大学が有する学校文化を明らかにするため、インタビューデータは副資料と

して提示することとする。

3. 考察

「華僑大学」の学校文化を分析するにあたって、愛国主義教育をその軸として設定し、文献資料を用いて「華僑大学」の歴史的背景、カリキュラムを分析した。また、暨南大学で行われている思想教育の授業をかれらの語りをもとに詳細に記述することによって、その学校文化を浮き彫りにすることを試みた。分析の結果、以下のことが明らかとなった。

1. 歴史的背景：受け継がれる国家政策

文献資料の分析から、華僑のために設立された暨南大学の創設の歴史や教学主旨のなかに伝統文化伝達や愛国主義教育などが盛り込まれていることが明らかになった。愛国主義教育のみならず、思想・政治面での教育が、「華僑の置かれている環境に配慮して」行われてきたが、「華僑大学」が行う思想教育は、海外の華僑・華人を大陸の学生とは異なる教育が必要である対象として特別視し、大陸の生徒とは異なるカリキュラムを実施することにより、中国人ではない「華僑」アイデンティティに関わる知識や価値観を大学が伝達しようとする意図がよみとれる。

2. カリキュラム：「思想道德修養」科目

暨南大学では、1983年から政府の指示により「愛国主義教育課程」が開設され、現在でも「思想道德修養」と呼ばれる科目が、海外華僑の必修科目となっている。カリキュラムの分析からは、大陸出身ではない海外華僑に、どのように中国の思想や文化を伝達しているかという点で、「華僑」アイデンティティを伝達する学校文化を大学が有していることが明らかとなった。

3. 教育実践：「南京大虐殺」ビデオをめぐるエピソード

「南京大虐殺」のビデオを観る「思想道德

修養」の授業に、大陸の学生と華僑学生がともに参加している場面を、教育実践の例としてとりあげ、分析をおこなった。

そこからは、教室の中での教師との相互関係において、日本からの華僑が特別な存在として位置づけられていることがわかった。すなわち、中国語を自由に操ることができ、また大陸や台湾の国籍を持っているにもかかわらず、「日本から来た」特別な学生として位置づけられている。つまり、もともと「華僑大学」では制度上、華僑（香港・アモイ、海外出身の学生）は「外招生」と呼ばれ、「内招生」と呼ばれる大陸出身の学生とは区別されているが、日本からの華僑は、教室の中では日本人留学生のように扱われ、中国人アイデンティティを形成する対象として、他の外招生とも区別され、位置づけられるのである。

これらの区別は、中国大陸内の他大学にはみることのできない、「華僑大学」が有している独特の学校文化であるということができよう。

今回の調査から、中国「華僑大学」の有す学校文化の2つの層が確認された。ひとつは、久富（1996）のいう顕在的側面としてみられる「制度文化」において、大学内に愛国主義教育を柱とする「華僑」としてのアイデンティティ形成をめざしたメッセージが伝達されているということである。そしてもうひとつは、潜在的側面としての「教員文化」においても、同様の伝達がみられることが確認された。

《参考文献》

- 寥ら（1988）トヨタ財団研究助成報告書 『華僑学校教育の国際比較研究・下巻』。
- 久富善之（1996）「学校文化の構造と特質」堀尾輝夫・久富善之編『学校文化という磁場』柏書房。
- 志水宏吉（2002）『学校文化の比較社会学——日本とイギリスの中等教育』東京大学出版会。
- *本調査は、2007年度大阪大学大学院海外短期留学研究助成金を得て行われた。